

陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (4)

－ 防災教育を通じた ESD －

中澤静男

(奈良教育大学 次世代教員養成センター)

竹田隼也・島 俊彦

(奈良教育大学教育学研究科専門職学位課程)

The fourth Teaching material creation for Education for Sustainable Development at researching cultural heritage in Rikuzentakata city

－ ESD through Disaster prevention education －

Shizuo NAKAZAWA

(Teacher Education Center for the Future Generation, Nara University of Education)

Junya TAKEDA・Toshihiko SHIMA

(Graduate School of Education, School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨：陸前高田市文化遺産調査を実施して3年目となる。陸前高田市では、高さ120メートルほどの山を40メートルになるまで切り崩すことで高台に住宅地を造るとともに、排出される土砂を旧市街地のかさ上げに使うという、ハード面での復興が目玉を引く。しかし、未だに多くの被災者が仮設住宅に暮らしておられ、生活再建の目途の立っていない高齢者も多い。そのような中、今回は高田東中学校仮設住宅集会所を訪問し、住民の方々にインタビューすることができた。インタビューを通して感じたことは、住民の方々が、互いが互いを尊重し、みんなで協力して困難を乗り越えようとしていることである。ここに見られる人と人のつながりが、大震災の被害を軽減したとともに、事後の危機管理にも効果を発揮している。また、互いに尊重しあう生き方は、持続可能な社会づくりの担い手育成にも通じるものである。本稿ではこれらの調査結果をもとに、特に事後の危機管理に焦点化し、ESDで育てたい人材育成にも寄与する、これからの防災教育計画活動案を提示した。

キーワード：持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development
東日本大震災津波 Great East Japan Earthquake tsunami
防災教育 Education for Protection against disasters

1. はじめに

奈良教育大学では、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトの一環として、陸前高田市を中心とした文化遺産調査に取り組んで3年目となる。今年度は、本学教員3名、大学院教育学研究科修士課程1名、専門職学位課程2名、学部生1名の7名からなる調査チームで、2014年9月9日から12日にかけて、文化遺産調査とそれをもとにしたESD教材開発、及びESD・防災教育の研究開発に取り組んだ。

今回の調査の主な日程は、1日目に名取市熊野本宮社・那智神社見学、大木貝塚・七ヶ浜歴史資料館見学、湊浜薬師堂見学。2日目が陸前高田市正覚寺での

仏像調査、高田東中学校仮設住宅集会所訪問・聞き取り調査、高田市長部コミュニティセンターでの聞き取り調査、3日目は黒崎神社（東岸寺）での懸仏調査、陸前高田市街の被災・復興状況視察、高田松原を守る会の松の育苗施設見学、常膳寺での仏像調査、4日目に平泉町に移動しての三輪神社大師堂見学、柳之御所遺跡見学、中尊寺見学、毛越寺・観自在王院見学という、盛りだくさんの内容であった。本稿においては、特に高田東中学校仮設住宅集会所訪問・聞き取り調査において学んだことを中心に、陸前高田市の復興計画にも言及しながら、避難所生活や仮設住宅での暮らしに焦点を当て、地域と連携したこれからのESD防災教育について考察する。

昨年度の報告書においては、文部科学省の「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き⁽¹⁾」を参考に、事前の危機管理（備える）と発生時の危機管理（命を守る）、事後の危機管理（立て直す）の3つの段階について考察を加えた。昨年訪問させていただいた仮設住宅の区長である松坂氏も「震災から2年半、これまでは生きるのに必死だったが、これからはどう生きるかが課題になると思う。⁽²⁾」とおっしゃっておられたが、今回は「事後の危機管理（立て直す）」について仮設住宅居住者の声をもとに、避難所生活や仮設住宅における人と人のつながりや、児童生徒の果たしうる役割について考察する。アメリカのノンフィクション作家であるレベッカ・ソルニットはその著書『災害ユートピア』の中で、「大惨事に直面すると、人間は利己的になり、パニックに陥り、退行現象が起きて野蛮になるという一般的なイメージがあるが、それは真実とはほど遠い。」「地震、爆撃、大風などの直後には緊迫した状況の中でも誰もが利他的になり、自身や身内のみならず隣人や見知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりを示す。⁽³⁾」そして災害は、「人々とつながりたい、何かに参加したい、人の役に立ち、目的のために邁進したいというわたしたちの欲求がいかに深いものであるかを見せつけてくれる。⁽⁴⁾」と述べている。本書の帯には「大爆発、大地震、大洪水、巨大なテロ—いつもそこにはユートピアが出現した」と記されているが、このユートピア運営の一部に児童生徒を位置づけたい。それは災害発生時のための備えというよりも、ユートピア的な活動を体験することを通して、「人々とつながりたい、何かに参加したい、人の役に立ち、目的のために邁進したい」という自己の欲求を発見することが、日常的な持続可能な社会の実現への活動意欲になると考えるからである。

2. 陸前高田市の復興計画

陸前高田市では、平成23年12月に復興計画を策定している。そこでは「災害に強い安全なまち」「快適で魅力あるまち」「市民の暮らしが安定したまち」「活力あふれるまち」「環境にやさしいまち」「協働で築くまち」という6つの基本方向のもと、11の重点計画が推進されている。そして「いのちを守るまちづくり」を最優先に、重点計画の基盤となっているのが、最大12.5メートルの海岸保全施設の整備と新市街地の形成である。

今回、陸前高田市を訪問して、まず目についたのが巨大なベルトコンベアである。現在、被災市街地復興土地区画整理事業が高田地区（192.4ha）、今泉地区（124.3ha）において行われている。今泉地区にある高さ120メートルほどの山を40メートルの高さになるよう削り取っていき、そこに新しくコンパクトな住宅

地を開発する。また、削り取りによって排出された膨大な量の土や岩を、ベルトコンベアで元の市街地に運び、市街地も高さ9～11メートルまでかさ上げして、新たに商業エリアとする計画である。



林立する巨大ベルトコンベア

さらに防災集団移転促進事業として、長部地区（113戸）、矢作・竹駒・高田・今泉地区（118戸）、米崎地区（133戸）、小友地区（56戸）、広田地区（136戸）を対象に進められている。この高台移転については、前例がある。2004年10月23日に新潟県中越地方を震源に発生した新潟県中越地震では、12万棟の家屋が土砂に巻き込まれ、水害のために損壊したが、2007年度までに15集落の住民が国の防災集団移転促進事業に基づき、高台へ集団で移り住んだ。集団移転が比較的スムーズに進んだ理由として3つあげられている。

一つ目が家の近くに安全な土地を確保できたこと、二つ目に集落自体が血縁・地縁でつながり、コミュニティが強いこと、三つ目が仮設住宅などでの避難生活の時から集落単位で行動していたことである。これらは1995年に発生した阪神淡路大震災では仮設住宅の入居をくじ引きで決めたため、地域コミュニティの分断が問題になったことを教訓としたものだ⁽⁵⁾。

陸前高田市においても、昨年度の聞き取り調査において、「仮設住宅が造られ始めた当初、高齢者や体が不自由な方を優先的に入居させたが、これは失敗だった。高齢者や体が不自由な方は引きこもりがちであり、新しい人間関係をつくることを苦手とする方が多い。そのため仮設住宅での孤独が問題になっている。後で仮設住宅に入居された方々は、元々住んでおられたコミュニティごとに入居されているので、入居後も人間関係が保たれ、仮設住宅内の集会室で編み物などの教室を開いたり、協力して畑作りを始めたといった活動が展開されている⁽⁶⁾」ことを報告したが、高台への移転についても、地域コミュニティを維持した移転が求められるであろう。

3. 高田東中学校仮設住宅での聞き取り調査から

9月10日に高田東中学校仮設住宅集会所を訪問し、集まってくくださった10名の方々から2時間にわたっ

てお話を聞かせていただくことができた。お話の内容は多岐にわたるものであったが、その概要を被災時の様子、避難所でのこと、仮設住宅でのことに分類して以下に記す。

(1) 被災時の様子

- ・ 大震災の二日前にも大きな地震があったが、その時は津波は来なかった。だから逃げ遅れた人が多かったのかもしれない。
- ・ 高校生の時に体験したチリ津波とは全く違い、覆いかぶさってくるようだった。エネルギーの大きさがまったく違った。30年以内に80%の確率で地震が来ると言われていたが、ここまで大きな津波が来るとは、誰も思ってもみなかった。
- ・ 父親から、地震の大きさじゃない、長さだ、長く揺れたときには津波が来ると言われていた。だから、大きい津波が来ると直感した。沿岸部の人たちは、地震があると津波が来ると、昔から聞いていた。
- ・ 水だけでなく、家の壊れたのや瓦礫と一緒に流れてくるので、助けることができなかった。年寄りをどうして助けられるかは大きな課題だと感じる。
- ・ 助けることができず、目の前で流れていった人の顔が浮かんで、夜、眠れなかった。
- ・ 高田松原の松が、津波に飲み込まれ、ボキンボキンと折れていくのが見えた。そのとき高田松原の松は赤松だったんだとわかったくらい、真っ赤で美しかったのが、悲しかった。
- ・ 防災無線は停電になったので、役に立たなかった。素早い伝達方法をどうするかは課題だ。
- ・ 防災対策の拠点施設も被災した。68か所ある第一次避難所のうち41か所が被災した。26か所ある第二次避難所も10か所が被災した。避難所で亡くなった人が400人くらいいた。マニュアルではなく、自分で判断して行動しなくてはならない。
- ・ 何が何でも逃げなさい。1メートルでも2メートルでも高いところに逃げないさいと伝えたい。全国の人が、今回のことを教訓にしてほしい。

(2) 避難所でのこと

- ・ 電気も水道もとまっていた。トイレはバケツに水を汲んで流すしかなかった。児童生徒が、バケツで水汲みしてくれた。
- ・ クロワッサンを一人一個、米を一人一合支給された。3時間も並んだ。物資はあるが、配布がうまくいってなかった。
- ・ 情報がなくて困った。誰が活着ているのか、どこに避難所にいるのかわからなかった。
- ・ 避難の際に肉親の手を放してしまって、心理的なダメージを受けている方も多くいた。
- ・ 助かった家から、米があるところは米を持ってき

て、味噌があるところは味噌を持ってきて、木材は流れてきたものを使って、炊き出しをした。そして、子どもや高齢者から先に食べさせた。

- ・ 小中学校の野外活動では、飯盒炊爨をやっておいの方がいい。一斗缶を炉にすると、ご飯を炊くことができる。

(3) 仮設住宅でのこと

- ・ この仮設住宅では自殺はない。
- ・ 月曜日から金曜日まで、75歳以上の方を対象にお茶を飲んで話し語りをするという、デイサロンをしている。
- ・ 年齢に関係なく、毎週水曜日にお茶っこ飲み会をして、話し語りしている。
- ・ 年に1回は仮設文化祭をしている。
- ・ 仮設で歌の練習をして、合唱団もつづいている。夜には火の用心、朝はラジオ体操、そのあとには子どもたちの見守り、みんなで野菜作り、金曜日の夜には、居酒屋もやっている。月一回はベテランズクラブで飲み食いをしている。麻雀の学校もある。すごく行事がある。全部出たら忙しい。でもそれがみんなの元気のもとになっている。
- ・ マスコミがここの仮設には笑顔がいっぱいあるということで取材に来た。みんなにここにしている。仮設に来てからの方が、友達も増えた。
- ・ ここから自立していった人が、かえってさみしいと言っている。わざわざ遊びに来る人もいる。
- ・ 会った人には必ずあいさつしている。そうすればいつか必ず返事がもらえる。そこから人づきあいが始まっていく。

以上の聞き取り調査を通じて、これからの防災教育に必要な視点について、次の3点から考察する。第1に必要な支援、第2に参加の重要性、第3が互いを尊重することである。

第1の必要な支援についてである。文部科学省が作成した「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」には、学校における地震防災のフローチャートを、事前の危機管理（備える）と発生時の危機管理（命を守る）、事後の危機管理（立て直す）の3つに分類して、それぞれの重要性が述べられている。今回行った聞き取り調査においても、「被災時の様子」の中で、「1メートルでも2メートルでも高いところに逃げなさい」「マニュアルではなく、自分で判断して行動しなくてはならない」といった、大震災津波を教訓とした発生時の危機管理についてのお話があった。避難訓練から発展したこれまでの防災教育では、避難持ち出し袋の準備、家族との連絡方法の備えといった、事前の危機管理や発生時の危機管理に重点が置かれており、多くの学校で危機管理マニュアルも作成されて

いる。

一方、事後の危機管理については、例えば学校が避難場所に指定されていることから、教員に求められる役割などについての研修は行われているだろう。しかし、避難される人数に対して教員の人数は限られており、十分な対応は出来かねる。そこで本稿においては、事後の危機管理として、避難所生活における児童生徒の役割を含んだ防災教育を提案する。高田東中学校仮設住宅の方々は、避難所で困ったこととして、次の4つを挙げられている。

- ① トイレ用の水の運搬
- ② 支援物資の配布時の混乱
- ③ 生存者に関する情報の混乱と少なさ
- ④ 炊き出しの手伝い

これらのことは、児童生徒でも十分に手伝うことができる内容である。実際に①トイレ用の水の運搬については、ペットボトルを使って水を運搬した児童生徒のことに言及されている。他の避難所では、また他の困難もあったかもしれない。そういった事実を抽出し、今後の学校での防災教育に生かすことは重要であろう。

第2の参加の重要性についてである。仮設住宅での暮らしについて、高田東中学校仮設住宅では、数多くのイベントが企画され、継続されている。これらを企画・運営する理由として、高田東中学校仮設住宅自治会長の金野廣悦氏は、「毎日目標をもって生きることが大切だと思う。目標のない人は引きこもったり、自殺になったりする。そうならないようにするにはどうしたらいいだろうかと、みんなで相談して始めたのが文化祭だ。」とおっしゃっておられるが、そのご苦労は並大抵なものではないだろう。しかし、それに積極的に参加する住民の構えも重要である。そのことについて金野氏の「こういう訪問も、毎日のようにある。そのたびに皆さんに案内しているが、断る人はいない。苦情もない。それが本当にありがたいと思っている。」との声からわかるように、参加するという住民の「支え」が、継続の鍵となっていることがわかる。

第3の互いを尊重することについてである。仮設住宅での暮らしについて、金野氏の「素晴らしい人たちがいっぱいいて、みんなが守られている。本当にすごいことだと思う。」「ここに来たときは不安いっぱいだった。でも、ここでの経験から住めば都だなあと思っ

ている。」という発言があったときに、すぐに他の方々から「リーダーがいるからですよ。」「この土台をつくったのは会長だ。」という声が出たことからわかるように、高田東中学校仮設住宅では、互いが互いを尊重し、みんなで協力して困難を乗り越えようとしていることが、インタビューの言葉の端々からうかがうことができた。今回の災害で、大きな借金をしたり、将来に不安を抱えたりしている人たちが、互いのつながりを大切に生きておられる姿に心を打たれた。

ドイツの社会心理学者であるフロムが、「ある」「分かち合い」「与え」「犠牲を払う」傾向であって、その強さの根拠は、人間存在の独特の条件と、他人と一体になることによって孤立を克服しようとする生来の要求にある。⁽⁷⁾と指摘するように、このような互いを尊重する人と人のつながりを希求し、それに参加したいと思うことは、本来的に人に備わったものであろう。

事後の危機管理に焦点を当てた防災教育を通して、人間本来の要求を自覚させ、災害時だけでなく、平常時においても利他的行為に積極的に取り組む児童生徒を育成することが、持続可能な社会づくりの担い手を育むことでもあると考え、次の指導計画を作成した。

4. 事後の危機管理に焦点を当てた防災教育活動案

本活動案は、小学校最高学年である6年生を対象として、総合的な学習の時間の学習として作成した。中学校においても、また小学校の下学年においても、発達段階を考慮した工夫を行うことで本活動案が活用できると考える。

(1) 単元名

避難所での生活から自分について考える

(2) 単元の目標

- ・ 避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人とのつながりに関心をもつ。
- ・ 避難所宿泊生活疑似体験を通して、自分たちでできることを考え、日常生活に活用できる「ユートピア宣言」を出す。
- ・ 避難所宿泊生活疑似体験での参加者のコメントを分類し、共通点を見いだすことができる。
- ・ 避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人との温かいつながりの大切さを理解する。

(3) 評価基準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
避難所生活に関心を持ち、自分たちでできることに意欲的に取り組もうとしている。	避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人とのつながりにおける自分たちでできることを考える。	避難所宿泊生活疑似体験を通して得た参加者からのコメントを分類・整理できる。	日常生活における、人と人とのつながりの大切さを理解する。

(4) 単元展開の概要 (全12 時間)

主な学習活動 (時間)	学習への支援	◇評価と○備考
1. 学習課題をつくる。(1)	・被災地で手伝う子どもの写真を見せ、防災に対する関心を高める。	◇避難所生活に関心をもち、自分たちにできることに意欲的に取り組もうとしている。(関・意・態)
避難所で自分たちにできることは何だろう。		
2. 避難所生活で自分たちにできることについて考える。(2)	・グループごとにKJ法を用いて考えさせる。	◇避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人とのつながりにおける自分たちにできることを考える。(思・判・表)
3. 避難所宿泊生活疑似体験を行う。(6) ・水運び、炊き出し手伝い、名簿作成連絡、話し相手等	・保護者、地域の方に協力を依頼する。	◇避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人とのつながりにおける自分たちにできることを考える。(思・判・表)
4. 疑似体験での経験や参加者からのコメントをもとに、人と人とのつながりについて考える。(2)	・避難所生活だけでなく、日常にも目を向けることができるように声かけをする。	◇避難所宿泊生活疑似体験を通して得た参加者からのコメントを分類・整理できる。(技)
5. ESDサミットを開き、「ユートピア宣言」を出す。(1)	・全校児童、保護者、地域の方を招待する。	◇日常生活における、人と人とのつながりの大切さを理解する。(知・理)

5. まとめ

これまでの防災教育は、災害発生を念頭に置いた備えや対応が中心であった。しかし、今回のインタビューを通して感じたことは、日頃の人と人とのつながりの大切さや、人への信頼、互いを尊重する態度の重要性であった。これらは、災害発生時の互いの助け合い、避難直後の被災者救済、そしてインタビューに対する「仮設に来てからの方が、友達も増えた。」の声に見られるように、避難所や仮設住宅での協力的で前向きな生き方の基盤となっているということである。そしてこれが大震災の教訓として、児童生徒にぜひ学ばせたいことである。避難所宿泊生活疑似体験における地域住民とのふれあいを通して、自己もそれを欲していることに気付かせ、日常的な利他的行為を促進する。このことこそが、ソフト面での防災対策でもあるし、持続可能な地域社会づくりへの一歩になるのではないかと考える。

注

- 1) 文部科学省『学校防災マニュアル(地震・津波)作成の手引き』、平成24年、p.4
- 2) 中澤静男・土海稚奈・英優美・二階堂泰樹、「陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(3)」『教育実践開発研究センター研究紀要』23巻、奈良教育大学教育実践開発研究センター、2014、p.165
- 3) レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』亜紀書房、2010、p.10
- 4) 同上、p.428
- 5) 毎日新聞大阪版、「「地域」維持し再建」13版、2014.10.23、p.3
- 6) 前掲、中澤静男他、p.165
- 7) Erich Fromm『生きるということ』紀ノ國屋書店、1977、p.148